

## 教員養成における教育社会学の困難を乗り越える

9月14日(土) 13:00-16:00 図書館棟2階 講義室

### 【趣旨】

近年、学校は社会の経済格差の問題やジェンダー・マイノリティー・生育歴・障害など多面的なアイデンティティが交差する複雑な場として捉えられている。そして教師はこうした社会問題の最前線に立つ存在として、より高度かつ専門的な見識と技量を持つことがますます期待されている状況にある。そのなかで、現代の教育課題および教員養成に対して、教育社会学の知見が重要であることは言うまでもない。

しかし、実際に教員養成で教育社会学をいかに教えるかは、その科目を担当する大学教員・研究者にとって複雑な課題となりつつある。社会階層やアイデンティティといった問題が、教員志望者ひいては社会にとってアクチュアルな問題になればなるほど、その問題はセンシティブなものになりうる。その一方で、均質性の高いローカリティーを経験してきた学生に対しては、社会構造の複雑さの問題性にそもそも関心をもたせることが困難な場合も少なくない。多様な出自の学生が想定される昨今の大学教育の現場において事態はますます複雑になっているといえる。それだけではなく、教員としての「即戦力」が求められることの多い教員養成の場においては、さまざまな批判力を持つ教育社会学の知見が、現場で流通している教育言説に対して緊張関係をもたらすこともある。また、教育社会学が教員養成において「必修」ではない現状や、「教職課程コアカリキュラム」による要請にいかに向き合うべきなのかという制度的な問題も横たわっている。

このような状況を踏まえ、本課題研究では教員養成における教育社会学の位置や意義を捉え、そこで生じている諸課題を再検討してみたい。上記の問題に対して、教育社会学者はどのような課題や解決が見出していくことができるのか。本課題研究ではさまざまな立場からの議論を通して、教育社会学の知見をいかに社会に還元するかというより大きな問題への見通しを得ることをねらいとしたい。

司会：川村光（関西国際大学）、粕谷圭佑（奈良教育大学）

報告1：太田拓紀（滋賀大学）

教員養成の「かくれた危険」と教育社会学教育の可能性

報告2：金子真理子（東京学芸大学）

「大学における教員養成」とは何か

—どこから来てどこへ行こうとしているのか—

報告3：鈴木雅博（明治大学）

教員養成における教育社会学の展開可能性

—エスノメソドロジーを事例として—

討論者：福島裕敏（弘前大学）

（研究委員：粕谷圭佑、川村光、林明子）

## オープンサイエンスと研究倫理をいかに両立させるか

9月14日(土) 13:00-16:00 E504

### 【趣旨】

近年の学術研究の動向として、オープンサイエンスの進展と研究倫理の重視がある。オープンサイエンスは、国内では第6期科学技術・イノベーション基本計画を契機として、学術政策の中でより大きな位置を占めるようになってきている。研究倫理にかんしては、各学会における倫理綱領の制定などが2000年代後半から進み、各機関において研究倫理審査が重視されるなど厳格化の傾向にある。

とくに研究データの扱いという点において、これら2つの動向には相反する側面がある。たとえば、オープンサイエンスの方針のもとデータを共有・公開することは、調査対象者・協力者の秘匿性を下げるという倫理面での課題を生じさせる可能性がある一方で、倫理面だけを強調すると研究を制約する可能性もある。ただし、これらは単純に相反するものでもない。むしろ、併せて理解を深めることが適切ではないだろうか。調査対象者の保護の観点がなくては、適切な共有・公開のあり方を議論することはできないはずだし、データ共有が推奨されれば、研究データを適切な範囲で共有することは研究倫理としても要請されるようになるだろう。あるいは、データ共有が進むなかで、さまざまにデータが活用されることに倫理的な問題はないのかも課題となりうる。

このような動向を踏まえると、なかでも社会調査を実施する場合には、これまで以上の配慮や、これまでは気にかけていなかった新たな点への注意が求められることが予想される。そのような変化は、調査の企画・実施から調査データの共有・公開に至るまでのプロセス全体に影響を及ぼすだろう。

以上を踏まえて、本課題研究では、まずオープンサイエンスと研究倫理の動向を共有したうえで、実際の質的・量的な社会調査の現場においてどのような課題を現在抱えているのか、あるいは今後生じうるかを提示する。そのうえで、オープンサイエンスと研究倫理の双方の動向に沿った社会調査をはじめとする研究実践が可能か、それをどう実現させることができるかを議論する。

司会：胡中孟徳（東京大学）、保田時男（関西大学）

報告1：南山泰之（国立情報学研究所・非会員）

研究データ管理とオープンサイエンス

報告2：田代志門（東北大学・非会員）

社会調査の倫理を問い直す—手続きの「厳格化」を超えて—

報告3：都島梨紗（岡山大学）

質的研究におけるオープンサイエンスへの対話に向けて

—透明性と匿名性のはざま—

報告4：石田賢示（東京大学）

計量的社会調査研究におけるオープンサイエンスと研究倫理

—調査研究実践で生じうる懸念について—

討論者：内田良（名古屋大学）

（研究委員：卯月由佳、胡中孟徳、白川俊之、丸山和昭、保田時男）